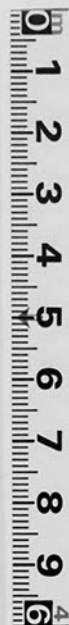


彼等自身

參月号



大正十五年三月二十五日開始發行 大正十五年三月一日發行 (每月一回) 發行





彼等自身
三月號

第二卷
第三號





彼等自身 三月號目次

磯濱より

・ 山村暮鳥 一

沼のほとり

・ 小泉純一 三

SPIRITUAL LANDSCAPE

・ 手塚 武 六

ある光景

・ 木村直祐 六

詩三編

・ 山川景太郎 三

自畫像

・ 杉浦勝郎 三

てな 享樂

・ 草野心平 三

百子

・ 舟橋聖一 六

冒される牧歌

・ 小林 剛 三

ケルンの伽藍に於ける説教

・ ハアゼンクレエフエル
土 方 定 一 六

喫茶

・ 石川 猛 六

磯濱より

山村暮鳥

自分はこの頃、シモンズの『ミケランゼロ』を読んでゐる。

此の本は崇拜的な書き方をしてゐないだけに深刻だ。それが一層瞭りとその偉大さを示してゐる。グサクやコンデビなどの記録を骨にして、それに私信をたくさん引いてゐることから、その人としてのミケランゼロが確實に描かれてゐる。

自分にとつて有難い本だ。

自分は自分の藝術的生活の前面にミケランゼロを知つてからといふものは、常に絶えず、そのミケランゼロを見てきた。どつしりとした大きな山岳だ。彼を見てゐると自分は落着く。虚榮も不安もおこらない。唯、けれど大きなそして力強い壓迫を感じる。

それがまた自分を生かす。

あゝミケランゼロ！ 人間が到達しえたその最高に立つてゐるのは彼だ。ナポレオンもその前には小さい。

自分は彼のやうな藝術家の人間の中に存在したことを不思議にさえ思ふ。それが藝術界ばかりでなく、どんな時代、またどんな社會にしたところで彼に比べられるやうな巨人があるか。

大きいやうにみえるのは誇張だ。だがわがミケランゼロにはそれがない。彼の製作はすばらしく

大きい。おそろくモデルを使つたものではなからう。そんなら空想の作か。けれどその眞實さは何としたものだらう。

そこに彼の偉大があるのだ。

此の偉大はどこから来たか。

自分等はそこにかのドナテロを見通してはならない。眞實そのまゝのやうなドナテロ。

石田愛兄。

兄はいふ——『生命は一つである。々を献ぐるは一つの事の外はできない。近頃のやうに次から次へと續々起る問題にその精根を打込んでゐては生命が幾つあつても足りないだらう。のみならず精根、それがために疲れてどれもこれも徹底を期する能はず、中道にして挫折し、結局蛇蜂とらずに終るであらう』と。ほんとにそうだ。兄がそこに氣附かれたことを自分はどんなによろこんだか。否、自分ばかりではあるまい。

さらに兄はいふ『こんな生活をしてゐてはならぬ。少くとも一つの最も重要な使命を守らなければならぬ。それは第一義底の事、大死一番底の事でなくてはならぬ。かう考へてくると私はどうしても宗教昌の人間であつて、政治運動などに行くべき人間ではない。いままで政治や社會の各種運動にたづさはつたのも、云はばその第一義の爲の手段とてであつたのだ。しかし私は手段で日を暮してをるべき場合ではない。須らく自分の本然に歸り來るべき時である』と。

眞に兄は政治運動や社會運動に駆けずりまはるには少し大きく且つ重過ぎる肉體と心の所有者だ。その手に下げた袍は、その外貌とは釣合はない。

自分は兄が牧師時代からの知己である。兄が牧師をやめたこと、それは同様な境遇にあつた自分として理解できる。それから兄は新聞記者となつた。次で上京した。そして『第三帝國』此の『文化運動』の前身)を經營されるやうになつた。いろいろのことがあつた。

それは兄としては當然踏まらるべき自然の道であつた。けれど自分には何となしにそれが不自然にあもはれてならなかつた。そうして兄の世界がより汎く、より社會的になればなるほど、兄のその濃厚篤實な性質と周囲との争鬭はいよいよ烈しくなるのが目に見えるやうだつた。實際またさうだつた。

今、兄の告白をよんで自分はほつとした。やつぱりさうだつた。やつぱり兄は敬虔と眞實との棄てられない、そして黄金や權力に酔えない人間なんだ。自分はそれがうれしい。兄は歸つてきた。歸つてきた。ほんとに濁流の中を泳いで而も溺らされないでかへつてきた。尊い經驗をもつてかへつてきた。

兄よ。

そして兄もまた寂しい一本道を辿らうとするか、寂しい道だ。けれどまたそれは何といふ幸福な道であらう！

兄に自分はサボナロラやイグナシアス・ロヨラを求めない。また日蓮を求めない。それなら法然は、それも違ふ。やつぱり兄はその圓滿さで親鸞のやうに生きてくれ給へ。ああ親鸞！

兄、もうお互はキリストを勞働問題や社會問題の張本人のやうに擔ぎ廻ることをやめなければならぬ。

菊茸山上にて、友よ。

すべてがいい、素敵にいい。よろこんでおくれ、養父の轉仕もうまく行つた。家もあつてすぐ越した。狭い家だが四室もあつてそして樹木にとりかこまれたいい巢だ。としより二人にはあれで十分だ。養母もそこへ歸つた。

昨日はふじ子を少しの間、貸してくれといふので、自分は彼等をおくつて行つた。獨りになる自分の不自由は忍ばう。けれど子ども達二人のことを考へると、妻をそこへやりたくなかつた。

自分はひさしぶりで都會にでた。その都會が自分には穴のやうにおもはれた。やつぱり自分には此の暑苦しいのに衣冠束帯でなければならぬやうな都會より、かうして身に一絲をつけず、素つ裸でゐられる此處がどんなに有難いか知れない。

都會にでたついでに醫者にみて貰つた。たいへんいいさうだ。さう言はれたときはうれしかつた。それから一ばん泊つて、また他の醫者に痔の方をみせた。たしかに痔瘻ださうだ。泣つ顔に蜂だね。しかしいますぐ切開しなくてもいいさうだ。このまゝ置いてもどしどし悪くなるといふほどでもないさうだ。どうしてもするやうなら秋涼の頃になつてしやうとの事だ。自分もそれがいい。それは胸の方との關係で、ほんとにいまやられることは酷過ぎる。まあ安心してよろこんでおくれ。凡てが此の通りだ。

體温も七度を超へないことが度々あるやうになつた。咳も減つた。

ただ氣の狂つた養母だ、こまるのは。それが一家を暗くしてゐる、ますます悪い。一ばん中、とりとめない事を喋舌つて家族を悩ましてゐるので、みんな眠れず、弱つて、疲れて仕事もなんにも手につかなかつた。

ああ、氣狂ひの祈禱、それは悽慘を極めたものだ。自分は思ふ、彼女にして信仰も何もなかつたら、もう少しのんきに生きれらるだらうに。彼女を氣狂ひにしたのも結局その彼女の宗教なんだ。彼等の宗教や信仰。それは健康者のあそびだ。かうなつて宗教や信仰がなんだ。なんだ。みんな嘘ではないのか。自分は實用的にばかりはそれを考へない。然しそれがなんだ。嘘だ。氣狂ひそれ自身には真でも、自分等から彼女のそれをみれば嘘だ。みんな嘘だ。空だ。それとも何だ。いろいろ自分はをしへられ、考へさせられてゐる。

そこに 此の常識以外に何かないか。

友よ。あんまりからだをいぢめないでおくれ。その梨の收穫がよし千二千になるにしてもそれとからだと交換出来るかい。自分は君のためにはらはらしてゐる。あんまり君はそのからだに對して残酷だからだ。生さられるだけ一日でも多く長く生きねばならない人間ぢやないか。そしてどつちにどんなことがあつても、一方はどうなる。靈魂のぬけ殻の寂しい一生をおくらぬために、またおくらせぬために。

君が庭隅をほじくつて行つたのは、それでも知らしくなつた。白瓜は五六本できた。みな元氣だ。胡瓜は四五本になつてしまつていま花盛りだ。人間ならば手のやうな蔓をながたとのばしたので棒切れをたててやつたらそれによるこんでからみついた。そしてずんずん伸びてゐる。さらにその手を高い垣のうへの方へかけた、それが如何にも感覺的にみえる。それから茄子はだめ、とうとう最後的一本まで、蟲に茎をそのまん中からやられてしまつた。

酸漿は一ど食べた。

南瓜もものなるだらう。

その妻をめとること。——よいのがあつたら無論貰ふべきだと思ふ。けれどよいわるいはもらつてみないと解らないので困るね。ろくでなしを押しつけられたら、それこそ一生の災難だぜ。

え。たまらなくなつたらクサモチでも何でも買ひに行くな。可愛い奴なら溺れるのも、ほれるの

もいだらう。あの『罪と罰』の中のやうな奴なら。だが終生の友とするものはどうしても尊敬のできるものでなくてはいけない。そんなのは急いで、まにあはせのやうには見附けぬものだ。

自分も君のそれに就ては無關心ではない。自分も女を買ったことがあるが、そのあとの取りかへしのつかないやうな馬鹿らしさを経験するためには、買つてみるのもよからう。自分のそれは、いまもだが、いまより何も知らなかつた年少の時分のことだ。(こゝなことを言ふのを許せ)女を買つたつて君は君だ。強姦したつて泥棒したつて人殺しをやつたつて君はやつぱり君だ。自分は何を信ずる。そして君は自分の親友であるのはなにの變りはない。けれどやらずにすむならやらぬことだ。

君のやうな聖者にそれができるなら、その時だ、一切のおどぎばなしが事實になるのは。

常分自もひとりぼつちだ。此の間にゆつくり晝寝でもしてやらう。だが一人で家族中の蚤にこんなやからは惱まされねばならないのを如何しやうか。いい試練だ。

三

石田愛兄。

その宗教體驗號のためにはぜひ何か書かせてもらはうとおもつてゐた。自分にはひとびとの前に語るやうな體驗もないが、それでも自分は雲の山上で四十日夜の難行苦行などまですしたことがあるので心竊かにそれらも此の機會で發表してもみたいと思つてゐた。そうしてひとびとの批評などもお聴きしたいとおもつてゐた。

その上、兄も御存知のとほり自分は此の病氣にとりつかれるまで二十年近くも傳導者とその學校生活をおくつてきた。傳導者としての體驗と、信者としてのそれとは、自分にとつては、大へんなまるで相背反したもののさへ經驗せられてゐるのだ。

眞善美の極致である聖の境地をその内容とする難行道の宗教、唱名一片で完全にできる易行道の信仰とさまざまの問題が自分の前にはよこたはつてゐる。さらに生活の一部分である宗教、宗教の一部分である生活、それよりもより自分を強く打つたものはこんどの義母の發狂である。義母は熱心なクリスチャンである。それを朝夕、肉をすかれるやうな嚴肅さでみてゐた自分……。

だがすべては他日のことだ。

此頃自分は太にいいが、妻が昨夜から發熱して横つてしまつた。自分等には二人の子どもがある。一人はまだ乳も呑んでゐるのだ。それを病人の自分が妻にかはつて見てやらねばならないのだ。自分一人もてあましてゐるものが、急に看護人となり子守となりお覺のまねまでしなければならぬんだ。かういふ仕末です。ゆるしてください。

奥様。いろいろのことと苦しみくるしんでゐる自分は大抵のことは彈ね返してしまふ。こんどの瀧さんの永眠についても、石田愛兄のをはじめ、いろいろの思想や弔辭はじつと耐えて、そして耐えられたがあなたの看護日記ではとうとう泣いてしまひました。注射の時は『イヤイヤ』と云ふて痛みを訴へましたが『坊やの病氣を……』云々ではすつかり此の胸をかきむしつて、熱い涙をより絞りました。女親の感情は本能的だから動かされます。

四

めつかりと朝夕が寒くなつてきた。草の葉っぱが枯れはじめた。毎日、小鳥捕りがその園のかこをぶらさげて裏の山にはいつてゆく。小鳥捕りは口笛をほんもの小鳥より上手にならずので、よく自分はそれにだまされる。ほんとに小鳥はかわいい、いろいろの小鳥がある、ひわ、めじろ、頬

白、四十雀、山雀、小雀、ひたき、のじこ、もず……。

自分はこのごろたいへんいい。もう熱も三十七度を越すことはないやうになった。気分もいい。暖もすくなくなつた。

で、よく子ども達とあそびにでかける。もう海邊は寂しく、そして風が強くなつたので、足は自然と山のほうにむかふのだ。

小鳥のなくのを聴きながら、松の林のおくふかい中をあるいてゐると、すこし湿々した、苦などの生えてゐるやうな矮な灌木のかけなどで、ひよつこりと初茸をみつける。

玲子がそれをみて、自分でも捜しだす。

「あつてよ、あつてよ」

「どこに」

「こちら」

なるほど紅味がかつた薄鼠色の初茸が、はやくとつてくださいとでも言つてゐるやうに、そこにてゐる。背の千草までがめづらしがつて喜ぶ。

猶々、深くはいつてゆくと、晝でも暗いほどの木立になる。そのあたりには緒の木の實がある。娘のはやい子ども達はすぐそれを發見する。

千草がまはらない口で、

「ぐみ、ぐみ」などといふ。みると眞珠のやうに眞紅なそれがびつちり枝にくつついて椎や山樺の筒にかくれてゐる。その邊には、茱萸のほかによつづみがある。野葡萄がある。

いまの自分はよくあそぶことを仕事としてゐる。それから食ふことと眠ること。ペンはとるけ

れど勞作するやうなことはつとめて避けてゐる。それでも興にのつてくると徹夜のやうなまねもする。寝てゐたのをあきだして、ふじ子に嫌な顔をされるやうなこともある。けれども暢氣第一にやつてゐる。世界切つて自分のやうな暢氣者は、此のせわしい世智辛い世の中にまゝ稀からうと思ふ。

それでも此頃は、机によらない日ではない。それはある新聞と契約ができて、小説を發表してゐるからだ。わざわざ匿名で、これは向ふ一ヶ年もしくは、其餘も續けやうとおもつてゐる。ある不幸な女が淫賣婦にまで落ちてゆく徑路、淫賣婦になつて、梅毒、肺病、トラホーム、濕疹といふ病魔の身で、而も光りかがやく心靈に生きてゆくといふ筋だ。その肉を罪にささげてほろびながら不滅の方へすすんでゆく！女のキリストだ、いやもつと自分は深刻にすら描かうと思ふ。牧師などをしてゐたので、實驗がそれをかかせるのだ。――まるで、これでは廣告だ。

五

毎日、床を離れてさへゐれば机にむかつてそして例の長篇小説と首つ引きをしてゐたので、新年號にはたうとうわすれて書かせて貰へずにしまつた。

手紙あみがたう。この頃はたいへんいいやうです。この間、通街へでたついでに、醫者に診て貰つたら、助膜がすこしぐずしてゐるだけで、ちよつと何にも解りませんな、と云はれた。そんなことはないんだ。けれどそれほどに快いのだ。――安心してください。

一昨夜の暴風雨で、すぐ近所の漁夫の船が沖でな、い、い、いしていまこころでは大騒ぎをしてゐる。

船はその明け方、とほりかけた機械船に見つけられた。その中にはたくさんの釣つた鯛や小魚と、横木にしばらくつけられたなり死んでゐる一人とがゐただけで、そのあとの四人の漁夫は影もみえないさうだ。それが一人だけ手傳ひで、みなその一家の親子兄弟なんださうだ。それからどうしたか、もう屍骸が見つかつたか、一時に四つの棺がでるわけだ。

そして家には中氣の老母とお上さんと子どもが幾人か残されたんださうだ。

「うむ、錢は海にあづけとくんた」

なんでもない時には、ああ云つて威張つて、錢さえあれば飲んで遊んで、年がら年中びんぼうしてゐる漁師がしみじみ自分にはおもはれてならない。

自分は百姓の子だけに、そしてそんな中に育つてきただけに、それとはおなじく人間の生活でありながら、まるで違つてゐる彼等に、はじめは驚嘆したものだが、かうしたことに遭遇と無理もないと思ふ。だがまたそれだけその家族等が、そのあとで乞食のやうにすぐ下るのも見るに忍びない。

彼等が、百姓にくらべて根性が悪く、薄情なものもみんなその生活から來てゐる。

兄、生活は怖いね、けれどその怖しさがまた自分にはたまらなく美しい。そんな怖しさと危険があるので、かうしてやつて行けるんだと思はれる。それに生活の倦怠を願ふものにとつては殊更！ だが自分等にはどうしても彼等のやうにはおれない。おそらく死ぬまでに一度もなれない。

なれないところが幸福なんかも知れないね。

自分等のやうに轉々して流れあるいてゐると、さまざまものをみ、さまざまことを経験する。

さて何處へ行つても、その中で一ばん強く感ずることはこれだ。

自分等がひととあまりに異つてゐることだ。そして世界には、その大部分がただ生きてゐるだけで生きてゐるもので充たされてゐることだ。彼等には藝術とか政治とか、教育、道德、なんにもない。宗教だつて、遊戯事だ。殊に痛快なほどにおもはれるのが自分等が天才だとか何とかいふものが彼等にとつては八ツ頭の親芋より以上の興味も有難味も感じられないことだ。

彼等は言はない。ただ一念に働いてゐる、生きてゐる、文化も人生もんだいぢやないんだ。それで立派に生きものとしての法則は遂行してゐるんだ。鐵のやうな健康と力をその子ども達にのこしてゐるんだ。智識的にも學理のやうな不徹底なものではなく、それはたいへんな迂路をしてはゐるやうにみえるが、それだけ確實に進んでゐるにちがひない。睿智だね。

彼等にはもう自分等はなんにも言へない。云つたつてんで解らないんだ。自分はいくたび自分の過去を顧みて、馬鹿だつたと自分を笑ふか知れない。

彼等の上に立つてゐるとおもつた。すくなくも同列には彼等をゆるさなかつた。自分等は教養のある人間だといふので、それは意識的ではないにしても、ところが、どうだらう。自分達といふ人間は、もうまづたく文化の中毒が、すつかり全體に廻つてゐる人間ではないのか。

世界の一切とは没交渉に、もつとも交渉してゐるつもりで空中で跳ね躍つてうれしがつてさわいでゐるのではないのか。みてゐてくれるのは仲間の誰彼ばかりさ。

自然と大多数の人類はそんなものをふりむいてもゐやしない。こつこつと自分自分のことをなんの名譽も失望も感ぜずに、ただ専念にやつてゐるに過ぎないのだ。

——と云つたところで各自は各自のしやうとおもふことをするまでだが、自分はどうかしてはやく一日もはやく此の文化的中毒から免疫されたいものだと思つてゐる。(未完)

沼のほとり

病室風景

小泉純一

冬の日の灯ともしまへのわびしさや坐りつかれて言わすがちに

ガラス戸の外は宵闇の桐島並み立つ幹が白じらと見ゆ

何か今ひとりごちつと思ひつつ月凍む窓を目守りたりわが

纖月が光りそめしと言ひしかばかすかに笑みぬ妻は眠りて

病院往來

夜寒道爪先痛さに急さくればひつそり明し灯ともる病室

月ななめに今宵もふけぬ子泣くらむ凍てつく木影ふみて急ぐも

土凍てし道の長手に風しきり夜寒月影おもふこと多し

ねしづまるわが家に笹のかげさむし月にさほひて歸り來ぬれば

なじみのうすい土地で、身寄もなければ、えて、他人をあてにする、
頼にする。あとでは、きまつて、感情のむだづかひをするのだが。

他人^{ひと}ごとのたのみがたさにうからどちせめて睦^{むつ}ぶはかなしきものを

吾^{われ}がをれば吾^{われ}をかこめりうかららに生^いきのさびしさは敢てしらせじ

後日の家居

落ちつきて今日こそ見つれきはやかにわが庭占^{しづめ}むるこの白梅^{しらうめ}を

鶯^うのささなきさこゆ朝日^{あさひ}さす庭に茶の木のかけこまやかにて

今朝^{けさ}はいと日ざしなごみてうるほへる地面^{ぢめん}に草の青さ目にたつ

冬ばれにくつきり直^すぐ立つ老松^{らうそう}のからびし光空^{ひかり}にあまねし

高處^{たかど}にて松は大きくゆらぎをり木暗^{こくら}き崖^{がき}の坂のぼりくれば

向^{むか}つ丘^{かみ}の横たふ雲に入日^{いりひ}さし夜寒風^{よふかぜ}にならんとするも

ほしもののしづく凍^{こほ}れる庭石^{ていせき}にむつとしみつく纖月光^{せんげつかう}よ

ひっそりかんとした沼^{うみ}だ、されぎれに五位^{ごゐ}がないて夕寒小寒^{ゆふかぜこさけ}

手塚 武

街

瞳孔ひとまなこの中に街を感じる

ガラス

刃

めづう

水晶

赤

青

黄

—Toron—YonToronYon—

———Ton——Yon——ToronYon———

ギタアルがさかさかさに鳴つて

するどいメスの肌に黄色い日葵の花がさしかかる

坂

起き上つて、頭から覆ひ被されさうだ

ある光景

木村直祐

狭い水田に

どやどやと家鴨のむれが闖入して

バシヤ、バシヤ、バシヤ、バシヤ暴れ廻つてゐる

小さい生命の狼狽はどうだ

逃げ切れない目高はやられたらう

やられる やられる

みんながやられる

こんなに素晴らしい天気なんだから

このむごたらしい光景がないなら

あたりはのどかでのどかで

何もかもが午睡でもするだらう

が、それよりも

あ天とうさまの前でこんな暴虐が、

大びらに行はれていいのか。

無題

たれかが

誰かを

待ち望んで居はしないか

これは

せつせつとはげしく動き出した時計である。

草を抜く

夕暮れだ

あかぼが嬉々とたはむれてゐるきれいな畑だ

たれだ

自分も黙つて

いつぽんいつぽん草を抜かうよと言ふ。

詩三編

山川景太郎

深緑・ドロ・借金

深緑わドロの中に姿をうつしている
 まつ赤な洋館がドロの中に埋れて見える夜だ
 細い松の葉がチロチロと僕の胸につめよつて来る
 烏わ細い松の葉に止らない

ドロドロドロ

風上に開けつばなしになっている便所
 僕わどうしても這入る氣がしない

ザクザクザクザクザク

崖の下のカベツチを堀つたところで借金が返せるわけでもない
 まつ白な肌着がブランデーにひたつてよつばらつてゐる。

煙つたい骨無しの墓地

まつ暗な晩だ

汽車わ走ることを忘れてしまつた
 線路でわ犬がやたらに吠えてゐる

この上よつばらつても酒を飲んだ方がいゝ
 骨無しのアカンボを埋めた墓地！

チロチロチロチロチロ

まつ白にぼけてしまつた

木の葉わバカに煙つたい

それでも犬わ吠えてゐる

ガロウガロガロガロガロ

恐ろしく暗い

ブルブルブルッ……

こんな晩に女が来るか知ら……

女が来なくとも 酒がなくとも

あゝ チロチロチロチロチロ……。

足音ばかりの伸び

夜になると犬が吠え出す
そして雨がドロドロにくづれる
足音わしない
汽車のケムリに家が揺れそうだ
チャルメラのひびきわどうにもならない
客車よりも貨車の方がなつかしい

空屋になつてゐるのもいゝものだ
『間代』がどこかえすつ飛んでしまつた
バサバサバサ
まっ黒な鳥が飛び廻つてゐる。

自画像

杉浦勝郎

酒精漬の胎児の哄笑するを聞く

何がなし蠕動する廻虫の斷末魔よ

男は月に吠えるのだ

さあ

崩壊する細胞の交響樂を聞け

水蒸氣もてユンラユンラ昇天する五体だ

灰色の嘔吐水もて弧線を畫く、苦悶の毒蛇だ

強烈な清心丹の香と溝泥の注射

やがてお白粉を飲むだらう可愛い淫賣婦の体臭よ
クロホルムに混倒した

汝月足らずの 騾馬よ

ギロチンは讀み歌を歌つたといふ

わが首を見つめて微笑する首のない美男子であつた

首のとれた瓦斯燈

ああ、何んといふ無氣味さだ

首のとれた瓦斯燈よ

バックリと口をあいて

醜くも街頭にさらされたり

人はみんな、よけて通る

てな 享樂

草 野 心 平

六本指のある女が

ぼくをラヴする

ぼくたちは月の下にゆく

女の肩に手をかけて すまして

がりツとその一本を噛みきる

女はさりざりすのやうに弱つて

ぼくの膝にたほれる

泣きながら笑ふ

ウフフ

ぼくも笑ふ

甘えずつばい涙で 月で

あ互ひ着物がびつしよになる。

百子

舟橋聖一

二六

外では青い冬の月が乾燥した空中を無数の三角形に區切つて、洋々と照り渡つてゐた。

私が疲れ切つた頭をもてあぐみ乍ら仕事をつゞけてゆく傍には、新しい妻の百子が、郡内の夜着にくるまつて寐入ばなだつた。

私の仕事は仲々捗らなかつた。そして今迄のもさうだつたけれど、今度のだつて決して誰も何とも云つてくれないことは判り切つてゐた。私は始めたばかりの仕事にもうそろそろ飽きが來て居た。

それに百子が、おきに布團から手を出す癖を持つてゐた。掛けても掛けても、傍から、はいでしまふのだ。その度毎に私は筆を擱いて、布團をかけてやらなければならぬ。私は四度び、布團を掛け直した時、もう再び筆を執る氣勢を殺がれてしまつてゐた。

○
レディ・ハミルトンの煙が靜かに流れる。恐ろしく深いしじまが、こまやかに私を取り巻く。それに襦袢をすつぽり着込んで、それでもまだ襟元から泌みこんで來る寒さだつた。

私は黙つて、宵の口にやつて來て二三時間もしやべつて歸つた或るプロ派の文士の話などと思ひ

出した。

『ブルジョア文士になつて舊時代の花と咲くか、プロ文士になつて新時代の下積みとなるか。どつちにしたつて恵まれてゐないんだね。潑刺たる新時代の花、そんなもなア糞を喰へだ。』

そんなことを云ひ乍らその友人は獨りで亢奮して喋つてゐた。所で私の書いてゐるものは、

舊時代の最後の花でもなければ新時代の土石にもならない。『今夜もやめだ。』

私はペンを折る。そして今迄だつて、何十本といふペンが今夜と同じ仕組で折られた筈なのだ。

突然百子の寐息が不調和音を作つて波の様に慄へた。掻き上げた鬚が水淺黄の箱枕の上でゆらゆらとゆれた。

その時、私はふと或る計畫の衝動に襲はれたのである。

私と結婚して以來、百子は決して左の足袋を脱いだことがなかつた。眞夏であらうが、寐る時であらうが、決して左の足袋をとらないのである。右の足袋だけぬいで、彼女は床へ入つた。

私がそれを訊くと、これはおまじなひだと云つて逃げる。あんまりしつこく訊くと、しまひには嫌な顔をして怒り出すのだつた。

私は一つ今夜こそと思つた。白足袋の神秘！それが私に探偵小説的興味を湧かせるのだ。

白足袋の下に、私はいろいろな足を考へた。小指のない足、六本指の足。指と指とがくつついてゐる足。手の様に長い指の足。爪のない足。毛が密生した足。

私は郡内の夜具と白い毛布の裾を捲くる。百子の黄色い右足と白足袋の左足とが初初しく、魚の腹の様な弾力に充滿したはぎを見せて、白いシーツの上を匍つてゐた。

そこで私はソツとこはぜに手を掛けた。それなのに百子は、氣のつく模様もなく、大人しい寐息を數へて行つた。こはぜが猫の目の様に金色にクルクルと光る。

『人の居ないところで、あたしはソツと左の白足袋をぬぐの。そして百足をジツと見つめるの。あたし、さつと百足の性になつたんだわ。』

女は私を尻目にかけて、左足を、膝の上に持ち上げた。

『こやつてキツスをするの。あたし百足が可愛いわ。』

髪を亂し、青黴い鼻筋をふるはして、女は青百足の繪に長い接吻をつけた。

私は奔騰する嫉妬を感じた。

『よし、俺が百足を退治してやる。俺の齒で百足を噛み殺してやる。』

私は百子の足を喰ひちぎらうと思つたのである。青百足の胴体から、眞赤な血がタラタラと垂れる様子をありあり見たい。又その青百足がのたうち廻つて、頭は頭、尻尾は尻尾で、百子の足をかけずる様子をありあり見たい。——私はそれが、その不思議な怪しい刺青師に對する復讐の様に思はれた。

けれども、私が百子の足に噛みつかうとする前に、百子は逸早く、帯の間から小刀を出して青百足の繪にズバリと突さしてゐた。

○
痼癩まざれに火鉢の中へ投げ入れた、白足袋が、先づ樺色に、それからセピアに、更に次第に紫色に燃えて行く。——キヤラコの燃える臭が、夥しく私の鼻を打つた。

女は傷口を押へ乍ら、よよと泣いた。微塵に引きさかれた昔の隱繪を抱いて、——私ははじめてこの女が感傷に泥酔するのを見たのである。

(十五、二十一)

冒される牧歌

小林 剛

田園風物詩

土方 定一

お父つあんは荷車にのせて病んだ娘を遠い遠い街に行く

ごろごろごろり

ごろごろごろり

どてらに丸まつて、頬被りした娘さんは私をばつちりとみる

ごろごろごろり

ごろごろごろり

さへずれ、雀

のどかになけ、牛

ごろごろごろり

ごろごろごろり

二六、二五、

父親は病んだ娘を大八車に乗せて行く、遠い遠い町の病院へ、ごとりと轍わだちの音をひびかせながら、父親は車を引いた。

『お父つあん、痛いよう。』

丹前にくるまつた娘は凸凹の道に、車が跳び上る度に泣き聲を立てた。

『我慢するだ。もうぢき町へ着くからな。』

父親はその度に足を止め、梶棒の握りを緩めて娘をいたはつた。

ごとり、ごとり。

道は長い。車はおそい。

ごとり、ごとり。

『お父つあん、あの花を取つて。』

娘はぼんやりとした目で梅の花を指して云つた。

『何、花だ。あの梅か。あれは他家のだ。』

父親は娘をたしなめる様に眺めた。だが、泣き出しそうな娘の顔を見ると、その儘では行けない様な気がした。

『たんぼぼを見つけてやるぞ。』

父親はほつとして、車を引きつゞけた。

ごとり、ごとり。

ごとり、ごとり。

『お父つあん、今頃たんぼぼなぞないよう。』

ごとり、ごとり。

ごとり、ごとり。

娘はわつと泣き出した。

『どうしただ。』

父親はあはて、車を止めた。娘を抱きかへた。

『花を取つてよう。あの花を取つてよう。』

娘は泣きつゞけた。

父親は元來た道を振りかへつた。

『それでは一つ貰つて来てやるからな。泣くでないぞ。』

『甚だすまない事です、娘が欲しがるのですが梅を一枝戴かして下さいませんか。』

『娘つて、貴方の娘さんかい。』

『え、負傷したもんで町の先生に見て戴かうと思つて、連れて來たんで。』

『それはお氣毒だ。だが梅の花も貰ひ手が多くて。』

『ほんとうにすまない事なんです。』

『それに近年梅の値もずつと上つてね。』

父親は道端に落ちてゐた枯枝を一つ拾つて、車の傍に歸つて來た。

『もつと行つたらういゝのを貰つてやるからな。これで我慢してゐろよ。』

娘は枯枝を取つて見た。半分に折つた。

『これ、梅ぢないよ。』

父親は黙つて梶棒を上げた。

「ごとり、ごとり。」

娘の泣聲に、野良犬が一匹ほえかゝつた。

「ごとり、ごとり。」

父親は梅の花を探さうとあせつた。遠くの畑、庭までも眺めまはしながら歩いた。野良犬は雀になつた。雀は赤牛になつた。父親は急いで歩いた。

「ごのごとごと。」

「ごのごとごと。」

「梅があつたぞ。」

父親は嬉しそうに叫んだ。

「あれ、あそこだ。」

車は跳び上りながら進んだ。音もない。赤牛もない。

「お父つあん、痛い。」

「お父つあん、痛い。」

父親が車を引いて、踏切りに上らうとした時、丁度汽車が來た。けたましい汽笛が鳴つた。

「お父つあん、汽車だ。」

だが、父親の目も耳もみんな、先に見える梅の花に掩はれてゐた。

町も近い。梅の花もあつた。けれども父親は汽車にひかれてしまつた。大八車は碎けてしまつた。娘は遠くの草薙の中にとばされてしまつた。

日は沈む。町の工場の音も止んだ。けれども町はづれの草薙の中では娘は獨り、ほんとうに獨り

で泣いた。

「お父つあん、痛いよう。」

ケルンの伽藍に於ける説教

ワルター・ハアゼンクレエフエル

陛下。

あなたは東から西への車行の途上神の家に入られた。群集は伽藍の前に待つてゐる。花環が街路を飾つてゐる。大砲の響きはフランデルンからひびいて来る。あなたの勝利に満ちた歩みを包む入口から鐘がひびく。多くの鐘は大砲に鑄られて黙つてゐる。鐘のかかつてゐる寺院は大砲の火の下に横つてゐる。オルガンが鳴る。赤條の參謀達は信者の席に立つてゐる。彼等はクラウゼウキツの戦争の本を手にしてゐるのだ。一瞬間軍隊の屯ろせる限りない曠野の静寂が支配する。榴弾は飛躍の途にて凝止し、水雷にやられた船は沈みかけて止る——この時こそ、陛下よ、祭壇の前に膝まづく瞬間だ。

歸休兵よ、お前達は何處へ旅するのだ。お前達の子供等はバンを得やうと店前に立つてゐる。お前達の泥まみれの上衣はストーブの邊でかはかされる。あなたは然し、陛下よ、神を忘れはしなかつた。占領した國からあなたの足はここへ急ぐ。あなたは祚る。鐘はひびく。最も神聖なものが捧げられる。胸をうてよ、罪ある人人！兵士達よ！——お前たちの皇帝の頭を御覽ん。

神に任へる職なる僧上よ。鐵十字架がお前たちの法衣の上に輝いてゐる。行けそして光榮に満てる戦争に説教をしろ！神が皇帝と相談る場所を去れ、自然は黙つてゐる。彼等は戦争の相談をしてゐるのだ。

夜は暗くなる。ケルンの街路は暗い。ただ二つの灯が燃えてゐる。探照燈と永遠のランプと。處女マリアよ、あなたは何を照すのです。私は機關銃を見る。神とラインの守り。陛下——神との謁見の前にあなたの足は躊躇うか。まもなく死者は檢べられやう。

此處に來い、戦慄しつつある世紀よ！たつた一つのことがお前に残つてゐる。皇帝と祖國とを守れ。地獄の混亂のうち、彼等の芽が平和と言ふ恐ろしい言葉のうちにめばえるとき、此の言葉の殺戮者を打つだらう。神の大本營には『新らしい勝利』と言ふ無線電信の言葉は通じない。敗戦國の獨身將校の食堂には油と膿は漂ひはしない。素ばらしい髭を生はした一人の將軍も天の勝利の並木道を歩きはしない。

伽藍の頂には防禦砲より高く星が輝いて居る。降りよ、支配者達、審判者は來て居るのだ！（土方定一譯す）

何か書かなければ、ならないとなると愉快ではない。で、今宵私は、書くといふ約束を果たすために、机に向つて居る。向つては居るが、もとより書く程の事があつたら、ずつと以前に書いてしまへる筈のものではあるし、さて、何も書く事がないのだ。

で、仕方なしに、甚だ不遜な言ひ方ではあるが、眞實私は仕方なしに、机に向つて居る。先刻から眠れて居る時計は、既に午前二時を示して居る。そして尙もカチカチやつて居る。この分で行つたら、時計は、永遠休みなしに時を刻むにちがひない。時計はウオルサムである。そんな事はどうでもいい。私はバツトの變りに購めたクロノスといふ安煙草を二箱程吸ひ、出がらしの紅茶を吸ひ、書く事もないのに何か書かうといふ、甚だ冒険な仕事に、あえて、身を委せて居る。こんな時には、古い本でも引き出して来て、書くのが、よささうである。私は明治二十三年發兌『しがらみ草紙』第十一號からのちび込みを持ち出して、今机上に置く。

× 處が、この『しがらみ草紙』第二十號、海外文話、大家の條にこんな事が書いてある。
大家々々、大家とは抑も何なる人ぞ。人に推稱せられてなれるにや。將た自ら尊長してなれるにや。何れの國、何の世にも大家といふものありて云々

何事ぞ、大家の中に少年の人をばおしなべて童女の如く見做し、少しく事業をなさむとするものあれば、慢心ものなり、年はまた三十にも足らぬになどとのたまふは、云々
そして、ギョオテを訪ひしハイネの事に就いて書き
嗚呼、ギョオテは獨逸の文學を代表するに足るべき大家なり。英吉和のシエクスピヤ、伊太利のダンテ、支那の羅貫仲々も比べべき大家なり。されど彼がころのあまりに高く、あまりに傲りて、後進の士を虐遇せしが如き跡あるを、われいたく惜めり。世の大家といはれた方々は、ころしてかかる汚點を青史に留めたまひそ。

と結んで居る。甚だ愉快である。最近文壇には、私は余り愉快がる事は止めたがいらいしい。頃日私のダイレッツタンテイズムは書く事に興味を覺えて来たからである
× さて、時計は三時に愈々近からんとする。私の煙草をくゆらす、紅茶を吸る、甚だ勇敢なるものがある。私は睡魔と闘ひつ、ペンを動かして居る。動かしては居るが、しかし、次に出来来る言葉は、甚だ讀者諸兄にとつては不遜な言辭である。で、睡魔の力の弱らざる勿論である。いや、それ處か、愈その力を加へて来た。思へば、編輯者土方定一は罪な男である。

× 私はフレッシユなものを求める。
× 私だつて、一人少女をなくしました。
ですもの
夫人
あなたが私の夫人でなし
私があなたの夫でなし
ですもの
夫人
さよなら
涙も甘いといふわけですよ。
(最も常識的な短篇小説。喉つちやいけない。土方！)

私は自動車愛する。尤も埃の多い日本では余り感心しない。故に私は、外國の坦々たる道路をドライブするの想像を、最も藝術的な私の幻想とする。自動車競走、競馬、あらゆる運動、都衆等愛する。がしかし、その群集の中の静謐さも愛する。

とまれ、私は甘いものが好きだ。

× 日本の人々は既にロダンを忘れて来たやうである。ロダンよりもマイヨールを愛する事が彫刻家の資格をなすものだと思得て居るらしい。けれど、ロダンは……ロダンは『藝術は静観だ』と云つた事がある。

短篇小説

男、女、悲鳴、銃聲、廊下、群集、男、脚、男、涙、脚、火酒、女、哄笑、嘔笑、爆發、銃聲、群集、男、男、銃聲、嘔笑、泥酔、泥、薔薇、苦笑、嘔笑、銃聲、神、……(完)
(最も常識的な短篇小説。)

又

さよなら
相互の唇が甘みかった。
損得なし
うらみつこなし
え?

人文會刊行書

オットー・ウィーニングル著 男女と性格 (定 眞價)
片山 孤村 譯述
アルツイバーシェフ著 作者の感想 (定 眞價)
馬場 哲 譯
アルツイバーシェフ著 永遠の幻像 (定 眞價)
馬場 哲 譯
◆水守龜之助氏の好意によりて、右の本を孰れも二割引でお取つぎ致します。一讀の價値のあるものであることは、自信を以てお薦め致します。本社宛に申込んで下さい。(津川)

山村暮鳥感想集

近日發刊

文藝講演會

二月二十八日 午後一時から

水戸 いはらき記念館で

入場料 三十錢

内藤 辰雄・日本の若き藝術家に求む

水守龜之助・政治と文藝

宮地 嘉六・思想の發生に就て

多田 文三・笑ひの文學に就て

本莊 可宗・題未定

堀江かど江・女性と文藝

同人

土方定一

石川 猛

木村 直祐

小林 剛

村井 勇吾

成田 義雄

杉浦 勝郎

津川 公治

山川 景太郎

新らしい六人の同人を加へた。
全部で九人だ。

四〇

毎月一回一日發行 (三月號)
(本號定價貳拾錢)

定價表

普通號	壹部 金貳拾錢	郵稅 貳錢
特別號	壹部 金五拾錢	郵稅 共
半年分	普通號 五册 金壹圓四拾錢	郵稅 共
壹年分	普通號 拾册 金貳圓七拾錢	郵稅 共

◆誌代はすべて前金御拂込の事
◆代金引替は一切謝絶す
◆郵券代用は意増の事

大正十五年二月二十五日印刷納本
大正十五年三月一日發行

水戸市下市荒神町

編輯兼

津川 公治

發行者

柴 博

印刷所

弘 文 社

發行所

彼等自身社

「注意」廣告料拂込意拾圓

彼等自身 三月號

大正十五年二月二十五日印刷
大正十五年三月一日發行

(每月一回一日發行)

定價金貳拾錢
(郵稅貳錢)